いつまでも悲しむ姿 見たくないだろう。

つばき油を作る秀一さん（右）と妻の春枝さん

陸前高田市・自営業石川秀一さん(72)
長男の政英さん＝当時(37)＝を亡くす

責任感の強い息子だった。消防団の班長として、最期まで住民の避難誘導や水門の閉鎖に当たっていたのだろう。遺体は気仙川の堤防沿いにあったポンプ車の中から見つかった。

つばき油を生産、販売している。東日本大震災前までは、息子も後を継ぐために手伝っていた。

津波で作業場は流されたが、2019年に息子が見つかった場所のそばに再建した。作業をしていると、息子がそばで見守ってくれているような感覚がある。

最期の言葉は「後は頼むよ」。消防団のはんてんを羽織った後ろ姿を見送った。何を任せようとしたのか、今となっては分からないが、もしかしたら覚悟を決めていたのかもしれない。

天国の息子も私たちがいつまでも悲しむ姿を見たくないだろう。残された家族が平穏無事でいられるよう、前を向いて頑張ろうと思う。

少しでも長く 生きてやろう。

再建した自宅でくつろぐ三條さん

石巻市・主婦三條すみゑさん(62)
三男の泰寛さん＝当時(17)＝を亡くす

石巻市の二子団地に自宅を再建した。仏壇の近くに泰寛のバレーボールシューズを保管している。震災前まで家族で暮らしていた市内の長面地区で、泰寛の兄たちが捜索中に見つけた。

3人の息子の中で一緒に過ごした時間が一番長いのは泰寛。泰寛が大川中と石巻商高でバレーボールに励んでいた当時は、練習や試合に合わせてパートのシフトを組み、ほぼ1年中、車で送り迎えしていた。

安住の地を持ち、ある程度落ち着いた半面、震災当時を思い出すようになっている。特に夜、ポツンと1人でいる時。ちょっとしたことで涙が出る。いろいろな方々に助けられている。パート仲間は新築祝いに集まり、仏壇に手を合わせてくれた。「大川伝承の会」の語り部活動で知り合った方々も支えになっている。

初めて語り部をした際、大川小へ向かう車内でなぜか涙が出た。でも、着いたら止まった。泰寛が背中を押してくれたのかもしれない。いろいろなことを経験し、泰寛の分まで少しでも長く生きてやろうと思う。

少しでもいい田を 将来に残したい。

芳恭さんが使っていたトラクターを見つめる俊美さん。津波被害を免れ、今も現役だ＝南相馬市原町区

南相馬市・農業遠藤俊美さん(74)
長男の芳恭さん＝当時(40)＝を亡くす

「こっちは天気だぞ。そっちはどうだ」

農作業の節目節目に、仏壇の写真に向かって声を掛ける。考えてみると、生きていた頃よりも、あいつに話し掛けているかもしれない。

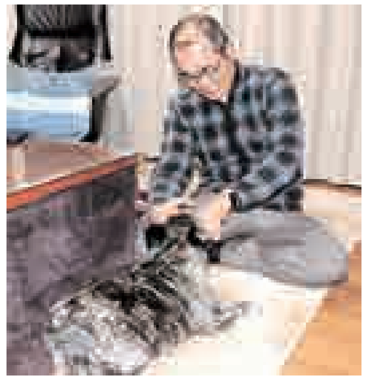
今、地元で農機の利用組合を作り、17㌶で飼料米の栽培に取り組んでいるが、あいつが生きていたら、ここまで農業と向き合うことはなかったと思う。たぶん楽隠居していたはずだ。

重機のオペレーターの仕事をしていた自分に代わり、家の農作業を担っていた。地元の土地改良区が管理する排水機場の監視を任されていて、あの日は海水が入り込むのを防ごうと水門を閉じるために排水機場に向かい、津波に襲われた。先に乗っていた車が見つかり、本人が見つかったのは42日目。堀の中だった。なぜか見つかる前、堀の中にいるあいつの夢を見た。

無念だったと思う。生きていたら、もっと栽培面積を増やしていたと思う。震災前、俺は田植えを手伝うくらいで、後は全てあいつがやっていた。責任感があり、手まめだった。農業関係の集まりなんかに出ても、あいつだったらどうするだろうと考えてしまう。

震災と原発事故で避難を強いられ、当時は再び農業ができるとは思わなかった。除染で土が入れ替えられ、決して良い土壌ではない。ただ、俺の代だけでは難しいかもしれないが、少しでもいい田を将来に残したい。あいつがいなくなってしまった今、それが俺の仕事だと思っている。

自然豊かなまち つくっていきたい。


再建した自宅で大吉と触れ合う小山さん

東松島市・副市長小山修さん(62)
父の和晴さん＝当時(77)＝、母の蓉子さん＝同(73)＝を亡くす

震災発生前日の夜、東松島市大曲浜にあった自宅のリビングのこたつで父と酒を飲み、そのまま2人で寝入った。よっぽど気分が良かったのかもしれない。起きた時に、母が黙々と後片付けをしていた姿が忘れられない。楽しい夜だった。

津波の第一報があった時、自分は東松島市役所にいた。自宅の両親に携帯電話で「遠くに逃げろ！」などと、なぜ伝えなかったのか。10秒間でも、5秒間でも連絡すればよかった。今でも後悔の念にとらわれる。

市内のあおい地区に自宅を再建した。近隣には大曲浜出身の人が多く、それなりのコミュニティーができている。朝晩、散歩をしている人が多い。私も雄のフレンチブルドックの「大吉」を連れて歩いている。

家族思いの両親が生きていたら、孫の結婚やひ孫の誕生、私の進路についてどう思うかを聞いてみたい。

東松島のハード面の復興はほぼ終わった。副市長として、人が住み続けられるまち、働く場があって自然が豊かだと感じられるまちをつくっていきたい。

心の奥には悲しみしかない。

墓前で手を合わせる博さん（中央）と長男の保さん（左）、次男の直人さん

名取市・無職樋口博さん(77)
妻の勝江さん＝当時(65)＝、母のつる子さん＝同(88)＝を亡くす

家内とは見合い結婚し、婿入りした。三歩下がって私を立ててくれる家内だった。おふくろはいつもニコニコ、朗らかで人当たりが良かった。2人が亡くなったのはつい昨日のよう。心の奥には悲しみしかない。

周囲の人に聞いた話によると、2人は地震の後、名取市閖上公民館に避難したが、「いっぱいだから」と言われ、閖上中に移動している最中に津波に流されてしまった。震災は天災だと思っていたが、人災だと思ってしまう。

家の仕事は全部、家内に任せていた。感謝の気持ち以外何ものもない。せめて今できるのは手を合わせることぐらい。毎日朝晩、仏壇にお茶やご飯をお供えし、月命日の毎月11日には墓参りに行く。2人が健在だったころの恩返しができるんじゃないかと、自分に言い聞かせている。

2人はあの世でご先祖さまたちとお茶飲みでもしているのだろうか。周りから「男やもめにうじが湧く」と見られないよう、樋口家を守っていきたい。

一人、とても寂しい。

宮古市・無職堀子朝子さん(81)
夫の活朗さん＝当時(75)＝を亡くす

震災の記憶は絶対に消え去ることはない。今も気持ちは落ち着かないままだ。

一人住まいの災害公営住宅の窓から外を眺めれば、夫ががれきの中から見つかった場所が、階段の踊り場からは夫の墓が見え、どうしても当時を思い出す。本音を言えば、ここに住みたくない。

思えば震災の1週間ほど前から夫の様子がおかしかった。急に怖いことを話したり私に暴力を振るったり…。虫の知らせがあり、何かに誘われていたのかな。

「うるさいからよそに泊まってくれないかなあ」と思うときもあったけれど、今となればかけがえのない存在だった。一人でいるのはとても、寂しい。

娘の好きな越喜来。

東京都練馬区・会社役員瀬尾真治さん(66)
長女の佳苗さん＝当時(20)＝が行方不明

震災後5年間は毎月、娘が行方不明になった大船渡市三陸町越喜来地区に通い、捜し続けた。娘は震災当時、北里大の2年生。地区に大学のキャンパスがあった。

現地を訪れるたびに地元の方々と知り合い、「越喜来で娘さんを預かっているよ」と告げられて多少ほっとした気持ちになった。今でも越喜来に行くと、「ほら、ここに居るよ。会いに来てくれてありがとう」と言っている気がする。

娘は越喜来が大好きだった。このままではかわいそうだと思い、2011年7月の海の日に旅立ちの会を開いた。生きていたら結婚して、子どもも生まれ…。そのような普通の生活ができていたかもしれないと思うと、寂しいし、悲しい。

ビワの念珠 形見に。

仙台市泉区・僧侶大友雄一郎さん(51)
父の征夫さん＝当時(69)＝を亡くす

若林区井土にある海楽寺の住職を父から引き継ぎ、多くの人との関わりを大切にする生きざまに気付いた。父が積み上げたものが多く、感謝している。

震災発生の前日、夕食を終えて2階に上がるときの笑顔が忘れられない。見つかった遺体は損傷が激しく、警察官から対面を勧められなかった。常に弱いところを見せない父と、笑顔で別れられたことは一番の救いだった、と今でも思っている。

震災後、縁あってつながった京都の念珠店に頼み、父が津波に耐えるためにしがみついていた庭のビワの木を加工してもらった。形見として身に着けている。

遺族、不明者家族の思い ②

河北新報アンケートから

「やり切りなさい」 母が背中を押してくれる。

海辺を歩く鈴木さん＝宮城県女川町

宮城県女川町・大学3年鈴木智博さん(21)
祖父の金利さん＝当時(79)＝、祖母の律子さん＝同(79)＝、母の智子さん＝同(38)＝を亡くす

葬儀も法事もやったし、お墓参りにも行くけれど、形式的なものにすぎない。3人が亡くなったことがあまりにも現実離れしていて、消化し切れない。

事実を突き詰めていくことはできるんだろうけど、どこか拒否反応を感じている自分もいる。今は消化不良のままでいたいと思う。

当初は苦しむ暇すらなくて、家族や知り合いにも胸の内を話さなかった。思春期だから、周りの人に弱い部分を見せたくない思いもあったのかもしれない。

数年前、自宅のあった尾浦の倉庫から、母の短大の学生証が見つかった。短大に通っていたことすら知らなかったので驚いた。今思えば、女川での交友関係もよく分からない。母については知らないことばかりだった。

最近、自分で料理をするようになり、母が通った精肉店などにも足を運んでいる。買い物の話題をきっかけに、犠牲になった3人との思い出を家族で話す機会が少し増えた。

中学生の時、町内の21の浜に津波避難の教訓を訴える「いのちの石碑」を建立する活動を始めた。1000年後の人々に震災の教訓を伝承し、災害による犠牲者をなくそうと、今も同級生有志と定期的に集まり、県内外から訪れた人たちに震災当時の状況や防災の大切さを伝えている。

活動の原動力の一つは、母をがっかりさせたくないという思い。中途半端なことが嫌いな人だったから「やり切りなさい」と背中を押してくれるはずだ。

「由衣、どうしたらいい？」 話せたら よっぽどいいのに。

大学から取り寄せた由衣さんの卒業論文を読む柏崎さん

大船渡市・主婦柏崎美保子さん(69)
三女の高木由衣さん＝当時(25)＝を亡くす

娘は震災直前の3月7日に新婚旅行先のグアムから帰ってきたばかりだった。もう少し長く滞在していたら良かったのに…。市の保健師になって2年目。エイズ予防の啓発など持論をだんだん語るようになり、本当にこれからだった。娘はもっと悔しかっただろう。

生まれてきてくれて、ありがとう。短い時間だったけど、互いに精いっぱい生きた日々に後悔はない。一緒にいたくて、位牌（いはい）を寝室や旅行先にも連れて行く。

生きた証しを求め、娘の大学時の卒業論文を取り寄せた。陸前高田市内を戸別訪問してアンケートを重ね、幼児の虫歯の要因を研究した。末っ子の甘えん坊が、頑張って成し遂げた。

市に、娘の誕生日をナンバーにした軽ワゴン車を寄贈した。健診やサロンで市内を動き回ってほしい。

嫁いだ娘の親は法的に無視されているような気がして、すごく悲しかった。再建する市庁舎に犠牲職員の刻銘碑を作り、頑張ったと認めてあげたい。「由衣、どうしたらいい？」。話せたらよっぽどいいのに。

コーヒー2杯。 「香りだけでも楽しんで」

「夫と長男はコーヒーが好きだった」と、仏前にコーヒーを供える後藤さん

東松島市・無職後藤照子さん(77)
夫の新さん＝当時(71)＝、長男の新一さん＝同(41)＝を亡くす

週1回、仏前に入れたてのコーヒーを2杯供える。夫と長男に「香りだけでも楽しんで」と話し掛ける。

東松島市東名の酒店に嫁ぎ、夫と長男の3人で切り盛りしていた。あの日はまず、割れた酒瓶の片付けに追われた。町内会の役員をしていた夫は長男に軽トラックを運転させ、避難所に向かった。住民を誘導しようとしたのだろう。そのまま2人とも帰らぬ人となった。

自分は店に残り、津波が押し寄せたが天窓によじ登って辛うじて生き残った。2013年以降は、次男夫婦が建てた一軒家に同居している。

夫と長男は仕事の合間にコーヒーをよく飲んでいた。2人の好みに合わせ、夫にはミルク入り、長男には砂糖とミルク入りを供えるのが習慣になった。

震災後に日記を書き始め、河北新報朝刊のティータイム欄に投稿。家族への思いをつづった文章が10回以上掲載された。元気でいることが自分の務めだと思う。

親戚に会う機会増え、 不思議な巡り合わせ。

「毎日仏壇に手を合わせています」と話す安部さん

仙台市宮城野区・会社員安部義典さん(61)
母の久子さん＝当時(73)＝ら6人を亡くす

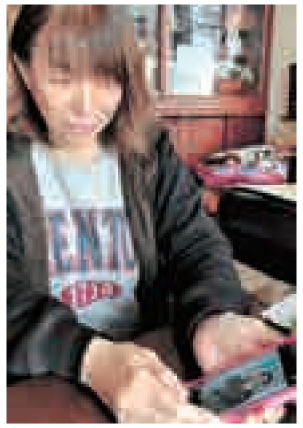
石巻市松原町に住んでいた母は、地震直後に近所の人の車で避難所に逃げたものの、飼い犬がいる自宅に戻って津波にのまれたようだ。母も犬も、自宅近くで見つかった。

1人暮らしで寂しいだろうと私が贈った犬を、母はかわいがっていた。世話するのが楽しく、元気そうだった。私も月に数回、半分犬目当てに実家に顔を出していたくらい。震災前、犬に新しい服を買ったのに着せてやれず、母の火葬時に一緒に棺に入れた。

住んでいた大宮地区では40人近くが亡くなった。母がどれほど津波に備えていたのか分からない。「何かあれば、これを持っていくから」。そう言って身近に置いていた貴重品入りのリュックサックは自宅で見つかった。皮肉にも、その後の市役所での手続きに苦労することはなかった。

震災では母、妹＝当時(43)＝、おい＝同(9)＝ら6人を亡くし、法要で親戚に会う機会が増えた。これまでめったに顔を合わせる機会はなかったのに、不思議な巡り合わせだ。家族の法要は、できる限り続けたい。

自分は忙しくないと駄目。


今年成人式を迎えた次男の写真を見る西ケ谷さん

大崎市・パート西ケ谷圭子さん(48)
夫の秀美さん＝当時(32)＝を亡くす

結婚して8カ月後の2000年12月、夫は交通事故に遭い、それからずっと寝たきりだった。

会話は文字盤やパソコンを使わないとできなかった。結婚したことも、子どもがいることも記憶から消えていた。

寝たきりだったけど、いろんな所に連れて行った。次男の学芸会が見たいというので、総練習の見学許可を小学校にもらい連れて行ったこともあった。

3月11日は、潰瘍性大腸炎を患う次男の診察で、仙台に行く日だった。午前9時ごろに夫を東松島市の福祉施設に送り、「ちゃんとお利口にしてるんだよ」と言って別れたのが最後になった。

夫がいなくなり気が抜けた感じはあった。自分は忙しくないと駄目なタイプだと気付いた。次男の学校の送迎と通院、自分の仕事などとにかくスケジュールを埋めた。

震災から10年。次男は今年、成人式を迎えた。夫は、10年間介護した私のことをどう思っていただろう。

「弱さ」と向き合う。

岩手県大槌町・無職佐々木文子さん(49)
母の土橋アイ子さん＝当時(69)＝、弟の土橋央さん＝同(35)＝を亡くす

大事な家族を失うと、10年たっても納得もしないし、乗り越えられもしない。

なぜ、私を置いて逝ってしまったのか。毎日考える。でも、そんな質問を2人にしたら、責めていることになってしまう。2人だって、もっと生きていきたかったはずなのに。

独立して関東に住む長女(27)と電話で話していると、娘をとても愛らしく感じる。そんなとき、母親のことを思い出す。「母も、私をかわいい娘と思ってくれていたのかな」と。

悲しくて、生きているのもつらいと思うことがある。でも、気持ちを強く持って、自分の中の「弱さ」と向き合って生きていかなければならないと思う。

落ち着いてきた。

名取市・会社員出雲隆さん(46)
祖母の啓子さん＝当時(86)＝、母のとき子さん＝同(62)＝を亡くす

生きているときは、いるのが当たり前だったが、今になると「そういえばいないんだ」と改めて思う。2人には「子どもがこんなに大きくなったんだ」「閖上の町はこうなったんだ」と話してみたい。

子どもたちと震災当時の話をすると、たまに2人の話が出てくる。「あのとき、おばあちゃんはこうだったね」などと話していると思い出す。普段の会話の中に思い出が残っている。

震災から10年がたち、自宅やお墓も再建して気持ちは落ち着いてきた。親として生活していることを1回でもいいから話したい。でも、今まで1回も夢枕に出たことがない。俺が臆病だと知っているから。

会える時に会う。

陸前高田市・歯科医村上加奈さん(40)
父の徳行さん＝当時(63)＝を亡くす

震災当初と比べ、心情はある程度落ち着いた。亡くなったのはどうしようもない。震災後に歯科医院を開業したが、父が診た患者さんらに助けられている。父の最期は分からないが、今知っても何もできない。人はいつ死ぬか分からない。もともと出無精だったけれど、友人らにはなるべく会える時に会っておきたいと思うようになった。